

〈原 著〉 第52回 日本赤十字社医学会総会 優秀演題

専門・認定看護師による看護の質向上への取り組み 「慢性看護カフェ」の実践

名古屋第二赤十字病院¹⁾ さいたま赤十字病院²⁾

深谷 基裕¹⁾ 佐藤仁和子²⁾ 大野 誉子¹⁾ 山本なつ美¹⁾ 今井田清美¹⁾
黒滝亜沙子¹⁾ 萩原 寛美¹⁾ 月足 仁美¹⁾

Strategies to improve the quality of nursing by certified nurse specialists and certified nurses: Opening “the café of chronic illness and conditions nursing”

Motohiro FUKAYA, Ninako SATO, Takako OHNO, Natsumi YAMAMOTO, Kiyomi IMAIDA
Asako KUROTAKE, Hiromi HAGIWARA, Hitomi TSUKIASHI

Japanese Red Cross Nagoya daini Hospital
Japanese Red Cross Saitama Hospital

Key Words : 看護の質、専門看護師、認定看護師

Quality of nursing, Certified nurse specialist, Certified Nurse

I. はじめに

医療の進歩に伴い疾病構造が変化し、患者の高齢化、重症化が進んでいる。近年、入院期間の短縮に伴い患者に必要な看護は多様化し、必要量も増えている。中部地方にある高度急性期病院のA病院では、急性・重症患者への看護は勿論のこと、糖尿病や認知症など慢性看護の知識・技術が重要であり、必要とされている。

A病院の看護職員は看護師の約50%が20歳代、約30%が30歳代である。看護師の臨床経験年数が6年目以上の中堅は約50%で、平均勤続年数は約8年である。近年は子育てをしながら働く看護師が増加している。A病院では看護の質を維持、向上するために平成27年度より専門看護師（以下CNSとする）と認定看護師（以下CNとする）が、各個人の興味や関心からがん看護、急性看護、慢性看護、小児・母性看護の4つ分かれてグループ活動を開始した。

このうち、慢性看護グループは精神・小児看護のCNS、糖尿病、認知症、感染管理、慢性心不全、脳卒中リハビリテーションCNから構成された。このグループ活動のなかで、A病院の現状分析から、「慢性看護カフェ」と称する勉強会を企画し、実践した。今回はその実践を振り返り、課題を明らかにしたので報告をする。

II. 目的

本実践報告の目的は「慢性看護カフェ」の実践を振り返り、今後の示唆を得ることである。

III. 実践期間

2015年7月から2016年6月までの1年間である。

IV. 実践の方法

1. 現状分析

慢性看護グループでの現状分析では、看護師の働き方の変化より、ワークライフバランスに考慮した短時間での学習、臨床現場で起こっている課題に即した学習の必要性、中堅看護師の知識とアセスメント力の強化が必要であることが明らかになった。また、看護の質とは、人材の質の向上とイコールであり、スペシャリストとジェネラリストの協働の必要性があげられた。そこで従来の勉強会よりも短時間で、慢性看護の知識・技術を伝授でき、気軽な気分で参加でき、疲れた体にお茶とお菓子を提供する慢カフェが提案された。

2. 慢性看護カフェの企画と運営

慢性看護カフェの各会のテーマは臨床現場での課題をもとに慢性看護グループで話し合い、抽出を

した。開催時間は日勤後の30分間／回で、年3回、慢性看護グループメンバーが講師をすることにした。講義の内容の構成、焦点化については、グループ間で複数回協議をして、精練した。現状分析では中堅看護師のアセスメント力の強化が課題となったが、興味がある人には参加をしてもらいたいという企画者の希望から、対象者は経験年数を問わないことにした。慢性看護カフェの広報はポスターを作成し、看護管理会議、イントラネット、各CN、CNSにより行った。学習形式はテーマに合わせてロールプレイ、寸劇、講義などを自由に組み合わせて行った。飲み物や菓子は慢性看護グループメンバーで用意した。

3. 慢性看護カフェの評価と修正

各会を開催した後に独自に作成したアンケート調査を実施し、慢カフェの開始時間、開催時間、実践へ活かせる内容であったかを評価し、慢性グループで企画の修正を実施した。

V. 倫理的な配慮

本報告において、個人および組織が特定されないように匿名化し、プライバシーに配慮した。また、所属施設の看護部において本報告内容の承認を得た。

VI. 実践結果

慢カフェ1回目はせん妄のアセスメント、2回目は糖尿病患者の意識混濁、3回目は脳梗塞の早期発見をテーマに実施した(表1)。

第1回目のせん妄のアセスメントに関しては、参加者から実践に活かせると好評であったが、講義資料が多く約15分の時間超過となり、参加者から「時間が長いと参加しづらい」、「お菓子やお茶があるのは日勤後に嬉しいが食べる際に音がする菓子は食べにくい」という意見があった。

そこで、第2回は摂取時に音がしづらいチョコレートなどの菓子をを用意し、30分で終了できる講義資料を準備した。しかし、17時半からの開始では会場設営する慢性看護グループメンバーも参加する側も開始時間が早すぎるという意見があった。そのため第3回は、17時45分からの開始とした。アンケートから参加者全員から開始時間について「ちょうどよい」という結果が得られ、実践に活かそうかという質問に対して、参加者全員が「活かせる」と返答をした。

慢カフェ開催後、実数は把握できていないが、CN、CNSへの相談件数の増加、副次的な効果として慢性看護グループメンバーの現場ニーズを汲み、焦点化した講義資料の作成がより短い時間でできるようになった。

VII. 考察

慢カフェの参加人数は8～16名で多くはなかったが、各テーマは現場の最前線にあるニーズをくみ取ったものであり、参加者の満足度は高かった。また、日勤後の30分間で実施され、多様な働き方をする看護師が増える今日において、ワークライフバランスを考慮した、ジェネラリスト育成の機会になる可能性がある。

CNS、CNはライセンス取得後、即戦力として期待されるが、現場の課題は様々であり、課題の抽出、方略を立てることなど、一人ではなかなか進まないこともある。今回、慢カフェにより各領域は異なるが、慢性看護というつながりのなかで、定期的に集まって、院内の課題を考え、活動することができた。これによって、それぞれの不足技術や知識を意識化することができ、グループで補ったり、支えたりすることで専門的なスキルを向上することができた。小松尾(2012)は介護支援専門員へのインタビュー

学習テーマ	参加人数	課題	工夫点
せん妄のアセスメント	15人	・時間超過 ・「講義中にお煎餅が食べにくい」	日勤後の17時半から開始
糖尿病で意識混濁！何が起きたか？	8人	・会場設営時間の不足 ・他の勉強会と重複	・時間管理の徹底 ・摂取の際に音がしにくい菓子の提供
あなたの気づきで脳梗塞を早期発見	16人	・なし	・17時45分から開始 ・厳密な日程調整

表1：各慢カフェの内容、課題と工夫点

ーからグループスーパービジョンを経験することで、スーパーバイザーは実践を見直し、言語化していったプロセスを明らかにし、そのベースには支えられ感があると述べている¹⁾。今回の実践結果から、慢性看護カフェは各CN、CNSを支えるグループ・スーパービジョンの役割を果たしていたのではないかと考えられた。

Ⅷ. 本実践における残された課題

慢カフェはまだ始めたばかりであり、システム化されていない。そのため準備に時間と労力がかかっていた。今後は準備、実施、評価を含め慢性看護カフェのシステム化をはかり、円滑に実施できるようにすることが課題である。

文献リスト

- 1) 小松尾 京子：グループスーパービジョン経験者の変化のプロセスと要因に関する研究 成長を支える視点から 日本福祉大学社会福祉論集 126：91-105, 2012.